

内在主義はどれほど外在主義的でありうるか
——背景条件・厚い概念という道具立てにもとづき、外在主義の挑戦に応じる——
中根杏樹

In what extent internalism can be externalistic? —— Responding to the challenges of externalism by means of "background-condition" and "thick concepts"

Nakane Anju

The debate between reason internalism and externalism concerns whether or not agents should act on a reason which they are not disposed to recognize as normative based on their already held desires. I insist that we could not find the way to reconcile the dispute between internalism and externalism, because we have not sufficiently taken the motivations of each camp into consideration. In this paper, I establish an internalism which contains externalism's motivations: desires aren't reasons and reasons are linked to one another independently of desires. This is argued in two steps: first introducing a distinction between reasons and background conditions, showing that in most cases desires are not reasons. Second the relationship between reasons is explained in terms of thick concepts and the notion of thick concepts is compatible with internalism. Adopting this strategy, internalism upholds its core claim and also satisfies the intuitions behind externalism.

はじめに

本稿は、「行為の理由」に関するメタ倫理学上の対立、内在主義(internalism)と外在主義(externalism)の対立を扱う¹。内在主義と外在主義は、Williams(1979)で明瞭な形を与えられて以来、約 40 年間にわたって激しい論争を交わしてきた。しかし、40 年にわたる論争を経た現在でさえ、デレク・パーフィットらが与する外在主義陣営と、バーナード・ウィリアムズらが与する内在主義陣営の間の溝が埋まる様子はない。第 1.3 節で論及するように、その所以は、「行為の理由」は一見したところ相反する側面を有しており、内在主義と外在主義は、異なる側面を重要視しているということにある。だが、筆者の見解では、内在主義と外在主義はどちらの陣営も、それぞれに異なる側面に目を向けることで、異なる真理を捉えている。そこで、本稿は、内在主義に依拠しながら

らも、外在主義の洞察が含む真理を尊重するような理論を構築することを目的としている。より詳細な目的や構成に関しては第 1.3 節に譲ることにしよう。その前に、本稿で扱う「行為の理由」や、それに関する「内在主義」、「外在主義」がどのようなものかについて、明確化する必要がある。

1. 理由に関する内在主義・外在主義

われわれは、とても多くの場面で「理由」を必要としている。たとえば、どの大学に進学するかといった、人生におけるとても大きな選択に直面する場合。牛乳をどこに買いに行くかといった、もっと瑣末な選択に直面する場合。どの選択の場合においても、われわれは、行為を支持する根拠、すなわち、理由を求めている。

しかし、「理由」という用語には曖昧性があるため、まずは、ここで問題となっている「理由」を整理しておく必要がある。第 1.1 節では、「理由」を区別し、行為を為すべき理由、すなわち規範理由(normative reasons)を主題として取り出す。つづく第 1.2 節では、規範理由に関する二つの立場、内在主義と外在主義を紹介しよう。

1.1. 規範理由を動機理由との対比によって導入する

はじめに、牛乳を買いに行くという日常的な行為を考えてほしい。私が「スーパーは、コンビニよりも牛乳が安い」という理由のもとづいて、コンビニではなく、スーパーに行くとしよう。もし私の信念が正しければ、他の事情が同じであるかぎり、私はじっさいにそうすべきであった、そうするのがよかった。しかし、私は誤った信念を抱いていたかもしれない。実は、コンビニのほうがスーパーよりも牛乳を安く置いていたかもしれない。このとき私は、他の事情が同じであるかぎり、ほんとうはスーパーではなくコンビニに行くべき理由をもっていた。ここで、「理由」という同じ表現が、二つの強調箇所、区別できることがらに対して適用されていることに注意してほしい。

本稿では、前者、〈じっさいに行為者が行為した理由〉を動機理由(motivating reasons)、後者、〈行為者が行為すべきであった理由〉を規範理由と呼び、整理する。動機理由の例は、「スーパーはコンビニよりも牛乳が安い」という心的態度の内容となる命題であり、規範理由の例は、「コンビニはスーパーよりも牛乳が安い」という真なる命題である²。われわれが選択の際に求めている「理由」は、どうするのがよいのか、どうすべきであるのかを示すような、規範理由である。そして、本稿の主題である内在主義と外在主義の論争は、規範理由をめぐる対立である。したがって、「動機理由」を脇に置き、これ以降、特別に断りを入れる場合以外には、「理由」と言うことで、「規範理由」を意味することにしよう。

筆者は二つの理由を整理した。この区別は、上記の事例で「ほんとうはコンビニに行くべき理由をもっていた」という言明が意味をなすことを受け入れる人なら、認めるはずである。しかし、このような規範理由に関する言明は、どうして真だと言えるのだろうか？ 規範理由に関する言明が真であるための条件とは何であろうか？

1.2. 内在主義／外在主義

ウィリアムズは、行為者にとってなにごとかが理由であるためには、行為者が現実に関連する目的を抱いていることが必要であると考えた。内在主義は、「なにが動機理由であるか」に関する理論ではなく、「なにが為すべき規範理由であるか」に関する立場であり、現実から離れた理想化という要素を必要とする。そのため、ウィリアムズは、「情報にもとづいてよく考える」という要素によって理想化を加える。したがって、より正確に言えば、内在主義は、なにごとかが理由であるためには、現実の目的を始点として、情報にもとづいてよく考えることで行為を導く、合理的な思考の道筋が存在しなければならないと考える。注意しておく、「思考の道筋が存在する」ということは、現実にその思考が行われていることを必要とせず、可能的であればよい³。

例を用いて説明しよう。たとえば、牛乳を買いに行く人が「牛乳を飲む」という目的を有しているなら、「コンビニに行けば、牛乳が手に入る」ということから、コンビニに行くという行為を結論づけるような思考の道筋が存在する。こうして、当該の命題は、内在主義の見解において、理由であるための必要条件を満たしている。

以上の内在主義のテーゼを、Williams(2001)の定式化に少し変更を加えて表すと、次のようになる⁴。(A は任意の行為者、 ϕ は任意の行為、R は任意の命題を指す)。

R は、A にとって、 ϕ するための理由である

only if

(1) A の既存の主体的動機群の内容(目的)からはじめて、 ϕ することを導く健全な熟慮の経路が存在する。

(2) R は、A の目的であるか、目的から ϕ を導くための考慮事項である。

定式に現れる「主体的動機群」は、「評価の傾向性や感情的反応のパターンや、個人的な忠誠心、多様な計画といった、行為者の具体化したコミットメント」を指す(Williams, 1979, p.105)。これらは雑多な態度の寄せ集めのように思われるが、そうではない。それらの態度の間には、なにごとかを〈実現すべきこと〉、すなわち〈目的〉として表象する態度であるという共通点がある。本稿では、作用を表す言葉として「主体的動機群」を用い、主体的動機群の内容を表す言葉として「目的」を用いる。「健全」

の性格づけは問題となりうるが、本稿では、十分に情報にもとづいているということ、行為者の心的態度が整合しているということを考えておこう^{5 6}。

さて、内在主義の主張は、牛乳の例に目を向けるともっともらしく見える。しかし、行為者が関連する目的を有しているかどうかとは関係なしに、特定の行為をする理由があると言いたい事例もあるかもしれない。たとえば、われわれはすべての人に対して道徳的に行為すべき理由があると考えたのではないだろうか。こうして、一部の論者は、内在主義のテーゼを否定するほうに傾く。そのような立場は、外在主義と呼ばれる。外在主義は、内在主義の主張する「行為者の既存の目的」の必要性を否定する(cf. Markovits, 2014, p.6)。外在主義の立場は、内在主義の否定によって特徴づけられ、目的との連関をどれほど強く認めるかによって、その強さは段階的に位置づけられうる(cf. 鴻, 2016)。

Parfit (2011)は、強い外在主義を受け入れる。彼の考えでは、目的は、理由言明の真理にとって、必要条件ではない。理由は、行為者の目的とは独立に存在し、行為者がどのような目的を有するべきであるのか、なにを行うべきであるのかを指示する (Parfit, 2011, p.46)。ジョン・マクダウェルは、より弱い外在主義の立場を表明する。彼によれば、理由は、行為者が適切に育成されているならば(徳を獲得しているならば)有するような目的に条件づけられている (McDowell, 1995)。このように、外在主義には強弱があり、その立場を一概に特徴づけることはできない。だが、内在主義と外在主義の間立った対立は、内在主義者は行為者自身の目的と理由の連関を主張するのに対し、外在主義者はそのような連関を否定するという点に存する。

1.3. 本稿の目的と構成

では、なぜ内在主義と外在主義の間には、上記で概説したような対立が生じるのであろうか? 「はじめに」で示唆したように、「行為の理由」には、全く異なる見解へと人々を促す、一見したところ相反する性格がある。管見では、この性格によって、内在主義と外在主義の論争は、調停困難なものとなっている。さて、問題の相反する性格とは、次のようなものである。

一方で、「私はどうして特定の行為を行うべきであるのか」という行為の理由を尋ねる問いは、ひとりひとりの行為者から発せられる、行為者個人についての問いである。したがって、その問いへの答えである理由は、行為者個人のあり方、とりわけ、当該の行為者がいかなる性格をしており、どのような計画、コミットメント、アイデンティティ等をもつのかという、個人の心理的事実に依存するという直観がある。この依存関係が成り立つからこそ、行為者は、ハンマーで頭を叩いて現在の性格、計画、コミットメント等を変えろといった没合理的な経路を介さずに、きちんと筋道立てて思考する

ことで（合理的な熟慮を通じて）、理由にもとづいて行為を導くことができる。

内在主義は、理由の個人的な側面、心理的な側面、合理的熟慮と行為の理由の連関を重視して、理論を構築してきた⁷。たとえば、Patrick(2012)では、「行為のための理由は、個別的な行為者に帰属されるのであり、為されるべき個別的なことがらを特定する」のであって、内在主義はこの性格を掬い上げるがゆえに正しい、と論じられる(Patrick, 2012, p.3)。以上の論点は、内在主義を支持する多くの論者に強調され、内在主義の基盤を成している(cf. Baize, 2012; Markovits, 2014; 鴻, 2016)。

他方で、「私はどうして特定の行為を行うべきなのか」という問いに答える際に、われわれは心理的事実を持ち出さない。つまり、心理的事実は理由ではない、と考えられる(cf. Nagel, 1970, p.80; Scanlon, 2014, p.48; Crisp, 2006, p.44)。むしろ、理由になるのは、この行為がお金儲けに役立つ、だが、この行為は人を騙す行為である等といった、心理的ではない命題である。そして、これらの事実は、ひとりひとりがなにを欲求しているのかといった個々の行為者の心理的事実に依存せずに成り立つ (cf. Scanlon, 2014, ch.2; McDowell, 1995; 安倍, 2016)。外在主義はむしろ、理由の非個人的な側面、非心理的な側面を強調することを通じて、自説を正当化し、内在主義を批判してきた⁸。

本稿では、内在主義の成否それ自体を論じることとはしないが、筆者は、上記で言及したような論拠にもとづき、内在主義を支持している。だが、外在主義の洞察は説得的であり、理由のもつ非個人的・非心理的な要素を掬い取ることなしには、内在主義を魅力的な立場として打ち出すことはできない。本稿の第2節、第3節では、外在主義による二つの批判を取り上げ、内在主義の内部で、このような外在主義の洞察を尊重することを試みる。この試みが成功するならば、本稿で描き出される内在主義は、理由は行為者個人の心理に依存するという基本的見解を保持しつつも、外在主義的に映る側面をもつことになるだろう。

2. 自己関与的な理由と自己関与的でない理由

2.1. ネーゲルとスキャンロンによる問題提起

トマス・ネーゲル、トマス・スキャンロンといった外在主義者にとって、内在主義の決定的な問題のひとつは、われわれは欲求を充足するために行為するわけではないということにある。内在主義の見解では、なにごとかが行為者にとって理由であるためには、主体的動機群が前提されなければならない。ネーゲルは、この見解に対して、純粋に利他的な理由からの行為を説明できないと論難する。

私は、代わりに〔利他的行為に関する〕よりよい説明を与えることに集中したいと

思う。その説明によれば、利他主義を説明するためにわれわれの関心、感情などに訴えることは余計である。[...] 他の言い方をするなら、純粋な利他主義というのが存在するということである。(Nagel, 1970, p.80)

ネーゲルの批判は、直接的には動機理由に関する理論を対象としたものであるが、(規範)理由に容易に応用可能である。ネーゲルの理解では、内在主義の説明では、その行為者が他者に共感的であるがゆえにわれわれは隣人を助けるべきであるということになる。こうして、内在主義の説明は、純粋に利他的な行為を為すべきであるという可能性を排除するように映る。だが、ネーゲルの考えでは、だれかが困っているということにそれだけの理由が、われわれにとって、特定の行為を行うべき理由である。このようにして、ネーゲルは内在主義を退ける (Nagel, 1970, p.83)。

この問題に関して、外在主義は有利な立場にある。外在主義者は、理由が必ず主体的動機群を前提するという見解に賛成しない。したがって、理由がつねに自己に関与することになるという問題を免れている。だが、内在主義は、自己に関与しないような理由、たとえば純粋に利他的な理由が存在することを説明する必要がある。

さらに、スキャンロンは、以下のようにして、新しい論点を加える。

一般的に、理由の内容の中に「私は X を欲求する」を含むということは、もっともらしくない自己関与的な(self-regarding)性格を与える。というのも、行為者は多くの事例において、自分の欲求の充足に関連しない理由のために、当該のことがらを欲求するからである。人が世界の貧困状態を緩和することに貢献することを欲求している場合、その人が小切手を送る理由の一部はこのことがその人の欲求を充足するということであると言うのはもっともらしくない。一方で、もしロニーが、彼がダンスを好むがゆえにパーティーへ行くのだとしたら、そのとき、パーティーに行くための理由は、自己に関与するような性格をもつと理解するのが一番もっともらしい。(Scanlon, 2014, pp.48-49) [強調はスキャンロンによる。]

ここで、スキャンロンは、理由にまつわる二つの明白な事実を指摘している。第一に、多くの場合、動機理由には、「私は ϕ することを欲求する」といった自己の主体的動機群に関与することがらは含まれない。これは、ネーゲルの指摘と同じ論点である。

スキャンロンは、そこから歩みを進め、さらなる論点を指摘する。第二に、それでもなお、一部の動機理由には、行為者の主体的動機群に関与することがらが含まれる。たとえば、パーティーへ行くための動機理由のなかには、行為者がそれを好むということが含まれるだろう。他にも、映画を観に行く、美術館へ行く、苺味のアイスクリームではなくチョコミント味のアイスクリームを買うといった行為の理由においては、私

が何を好むか、何を欲求するかといった行為者に関する内容、とりわけ、行為者の主体的動機群に関する内容が、理由のうちに含まれる。この論点も同様に、規範理由に応用される。人がパーティーへ行くための（規範）理由にも、人の主体的動機群が含まれることはある。

外在主義者にとって、一部の理由が主体的動機群を含み一部の理由が主体的動機群を含まないということを認めるのは、容易い仕事である。たしかに、外在主義は、理由がつねに行為者の主体的動機群に依存するということを否定する。だが、その主張は、行為者の主体的動機群が理由に含まれることがあるという考えの余地を排除しない。じっさい、スキャンロンは、行為者の好みや関心を、なにが理由であるかを左右するような状況の特徴として認めている(Scanlon, 2014, p.49)。こうして、外在主義者は、一部の理由には主体的動機群が含まれ一部の理由には主体的動機群が含まれないという事実を、理由は主体的動機群に依存することもあれば依存しないこともあると、シンプルに説明することができる。

外在主義者の「説明」は、説明と言うにはあまりにも「説明力」がないという問題を抱える。しかし、ネーゲルの批判が正しければ、内在主義が抱えている問題は、説明力の欠如という問題よりも、決定的であるように映る。内在主義は、理由は主体的動機群に依存するという見解を受け入れることから、すべての理由は主体的動機群への言及を含むという考えを含意するように思われ、これはきわめて直観に反するからである。内在主義は、自説の基本的な主張を維持しつつ、理由が自己関与的である場合とそうでない場合を区別する必要に迫られる。

さて、以上の議論から、内在主義には次の課題が残される。

1. 内在主義は、一部の理由は自己関与的な内容を含まないということを説明しなければならない。
2. 内在主義は、第一の課題を解決したうえで、自己関与的な内容を含む理由とそのような内容を含まない理由を区別しなければならない。

次節では、マーク・シュレーダーの見解を展開し、この課題に応じる。

2.2. 〈理由〉と〈背景条件〉

ネーゲルは、内在主義的な見解のもとでは、純粹に利他的な行為に関わる理由を説明しえないと考えた。それは、内在主義を支持するならば、「行為者が他者に対して共感的である」といった行為者の主体的動機群に関する事実が理由となるように思われたからである。しかし、内在主義はこのような見解を必ず帰結するのだろうか？

シュレーダーの答えは、否定的である。シュレーダーによれば、内在主義が問題に陥るように見えるのは、理由と背景条件(background condition)の区別を引き損ねているからである (Schroeder, 2007, p.26)。シュレーダーは、〈ある種に属するもの〉と、〈それがなぜその種のものであるのかを説明するために必要とされるもの〉を区別すべきであると言う (Schroeder, 2007, p.34)。たとえば、「ボールがぶつかった」のが原因で、「窓ガラスが割れた」場合を考えてみよう。このとき、「なぜ窓ガラスが割れたのか？」という問いに対する答え、すなわち、窓ガラスが割れたことを説明する原因は、「ボールがぶつかった」ということである。一方で、それが原因であることの背景条件として、ボールが固いこと、ガラスが脆いことなどを挙げることができる。この例において、窓ガラスが割れた原因は、ボールがぶつかったことであり、ボールが固いことは、窓ガラスが割れた原因ではない。しかし、なにごとかが「原因」であるための背景条件として、ボールやガラスに関する事実を挙げることができる。

シュレーダーは、理由と主体的動機群に関しても同様の区別が成り立つと考える。彼はこの区別に準拠し、ライアンがケイティを助けたという例を引き合いに出しつつ、ネーゲルの誤りを以下のように診断する。

なぜネーゲルは、利他的なことがらによる動機づけ、つまり、他者に関与する欲求は、利他主義に数え入れられないと考えたのだろうか？ [...] 私の考えでは、ネーゲルは、理由と背景条件を区別していない。それゆえに、ネーゲルは、ライアンがケイティを助けるための理由が部分的にライアンの欲求によって説明されたならば、その欲求はライアンがケイティを助けるための理由に関する完全な言明において言及されねばならないと考えたのである。それゆえに、ネーゲルの見解では、ライアンがケイティを助けるための理由は、厳密に言えば、ケイティが助けを必要としていること、それに加えて、ライアンが、ケイティが必要としている助けを受けるよう欲求していることである。(Schroeder, 2007, p.26) [強調はシュレーダーによる]

シュレーダーの見立てでは、ネーゲルは、理由の説明に現れるものすべてを理由の一部とみなしたことから、内在主義では純粋に利他的な理由を認めることができないと考えるに至った。そうすると、ネーゲルによる内在主義の批判を導く推論のうちには、不具合が見出される。理由とその背景条件の区別を踏まえるなら、理由は主体的動機群に依存しているという主張は、主体的動機群は理由の一部ではないという主張と両立可能である。主体的動機群は、なにごとかが理由であるということが成り立つための背景条件ではある。だが、主体的動機群それ自体は理由ではない。このように主張する余地があるからだ。

とはいえ、この選択肢を採用することができるということは、その選択肢を採用することが正当であるということと同じではない。主体的動機群はたとえ理由ではなくとも背景条件ではあるという考えを、積極的に正当化する必要性が残されている。

2.3. 主体的動機群を背景条件であると考えることの正当性

筆者の見解では、内在主義において、(ほとんどの場合に) 主体的動機群は背景条件であるという見方は、正当である。思い出しておくなら、内在主義は、理由と合理的熟慮の連関を重要視し、なにごとかが行為の理由であることにとって合理的な熟慮の道筋の存在は必要不可欠であると考えていた。この点を踏まえると、熟慮における役割の違いによって理由と背景条件を区別するのは、内在主義の動機に適う。そして、熟慮における役割という観点から、理由と心的態度の間には、大きな違いが見出される。

この点を説明するために、まずは、理論的な熟慮の事例を考えてみよう。私は、いつも遅刻せずに学校に通学している。あるとき、自分はいつも何時ごろに通学しているのかと、疑問に思った。この場合、私の熟慮は、たとえば次のようなものであろう。

「私はいつも遅刻せずに学校へ行く」と私は信じている。

「私が遅刻せずに学校へ行くなれば、私は 8 時には学校に着いている」はずであると思いついた。

「私が 8 時には学校に着いているならば、私は 7 時には家を出ている」ということも確信している。こうして、

「私は 7 時には家を出ている」と信じるに至った。

このような熟慮において、「私は 7 時には家を出ている」という信念の根拠になるのは、カッコ内に現れる命題の内容である。たとえば、私が、「いつも 7 時には家を出ているはず。あまり時計見たことないけど」と発言し、それに対して、「そうだとすると、なぜ 7 時には家を出ていると言えるの?」と尋ねられたとしよう。このとき、「私がそう信じるから」と、私に特定の心的態度が成り立つという事実を持ち出すならば、それは求められているような理由を与える答えにはならない。「私はいつも遅刻せずに学校に来ていて、そうだとすると、7 時には家を出ていることになるから」と、その態度の内容に言及せねばならない。このように、心的態度の内容である命題と、それに対する心的態度は、異なる役割を果たしている。一方は結論を信じることを正当化する根拠になるが、もう一方はそうではないからである。

しかし、このような観察から心的態度の役割を見過ごすなら、われわれは誤った方向に進むことになる。特定の結論が正当化されるためには、命題に向けられている心

的態度を考慮する必要があるということも事実である。次のような実践的な熟慮の例を考えてみよう。

「私はいつも遅刻せずに学校へ行く」ことを、欲求している。

「私が遅刻せずに学校へ行くなれば、私は 8 時には学校に着いている」はずであると思いがたった。

「私が 8 時には学校に着いているならば、私は 7 時には家を出ている」ということも確信している。したがって、

「私は 7 時には家を出ている」ように私は行動する。

この事例を通じて注目すべき点は、結論の正当化に現れるカッコ内の命題自体は、理論的な熟慮でも実践的な熟慮でも同一であるということである。結論が行為を正当化するものであるか、信念を正当化するものであるかを左右しているのは、命題ではない。前提が現に成り立つことがらとして表象されているのか、目的として表象されているのか、という心的態度に関する事実である (cf. Anscombe, 1974, 230 頁; p.132)。以上の考察から、心的態度はそれ自体で結論のための根拠となるわけではないが、特定の命題が信念あるいは行為を正当化する理由であるための背景条件として働くと結論づけられる。

こうして、理由と背景条件の区別を通じて、われわれは、一つ目の課題を解決することができる。主体的動機群それ自体が理由であるという主張は、理由が主体的動機群に依存しているという主張から必然的に帰結するわけではない。主体的動機群は、なにかが理由であるための背景条件であり、理由それ自体は、たとえば「だれかが困っている」といった命題である⁹。こうして、内在主義は、純粋に利他的な理由の余地、より正確に言えば、そのような理由を含む、主体的動機群を含まない理由の余地を残している。

2.4. 自己関与的理由と自己関与的ではない理由の区別

以上のように理由と背景条件を区別するならば、今度は、スキャンロンが提起した課題、「自己の心的態度に関与する内容を含む理由とそのような内容を含まない理由を区別しなければならない」という課題に応じるのが困難になるように見えるかもしれない。スキャンロンはもともと、理由と背景条件を区別することによって、シュレーダーは新たな課題に直面すると指摘することを意図していた。心的態度を背景条件とみなすとき、今度は、いかにして心的態度が理由に現れる事例を説明するのが問題となる。

だが、本稿では、理由と背景条件を区別するのみならず、第 2.3 節の議論において、内容と作用の区別を行ったため、この課題に応じることはそれほど困難ではない。理由が自己関与的である場合とは、心的態度に関する考慮事項が内容として熟慮に現れる場合である、と考えられる。たとえば、ある行為者が、「快を得る」という目的に対して主体的動機群を有するとしよう。行為者は、自分の関心や好みに沿ったなにごとかを行うことを通じて、快を得ることができる。したがって、このような場合には、「自分は特定の俳優に関心がある」といった自分の心的態度に関する命題は、「快を得る」といった目的を始点とする熟慮において、考慮事項として現れる。このとき、「快を得る」ことに向けられた主体的動機群と、「特定の俳優に関心がある」という命題によって表される主体的動機群は、熟慮において異なる役割を果たしている。前者の主体的動機群は、熟慮する際の人の心の働き（作用）を表しているが、後者の主体的動機群は、熟慮における理由（内容）を表しているからである。

以上のように、理由と背景条件の区別を認めることによって、内在主義の基本的な主張に背くことなしに、自己関与的な理由と自己関与的ではない理由の両方を説明することが可能になる。

3. 心理からの独立性にもとづく批判

3.1. 心理からの独立性にもとづく批判

さて、以上のように、心的態度は理由の背景条件であると示し、理由のなかに行為者自身の心理は含まれないと主張することによって、ネーグルやスキャンロンは内在主義に説得されるだろうか？ 私は、次のように応答されるのではないかと考えている。「たしかに、内在主義においても、必ず行為者の心理に関する事実を理由に行為すべきであるということになるわけではないようだ。この点は私の間違いだった。しかし、私はそれでも君の描像には反対だ。君の描像では、たとえ主体的動機群それ自体は理由ではないとしても、やはり利他的に行為する理由があるということは、行為者の主体的動機群に依存しているということになるのだから。しかし、利他的な行為は、理由としてはもちろん背景条件としても、主体的動機群に依存することなしに、それ自体で、行うべきであるのだ。考えてごらん。人が困窮しているということは、それ自体で、その人を助けるという行為を要請するだろう」、と。

少なくとも、スキャンロンは、このような考えを明示的に抱いている。Scanlon(1998)は、「なにごとかを理由であるとみなすことは、なんらかの行為に向けられたたんなる賛成的態度ではなく、その結論にとって十分な根拠として特定の考慮事項をみなす判断である」という主張を行う (Scanlon, 1998, p.73)。そして、理由は主体的動機群に

依存せずに、それだけで十分に特定の行為を正当化すると考えられることから、内在主義のように他者の理由を動機に依存したものとしてみなすことはできないと結論づける(Scanlon, 1998, p.367)。スキャンロンの挙げた事例を借りると、隣人が雪かきに際して困っているということは、それだけでその人を助ける十分な理由であって、それが人を助けるための利他的な理由であるということは、心的態度を背景条件にさえしていないように思われる。特定の考慮事項が特定の行為に対する理由であるということは、内容の観点のみから語りうるのであって、背景条件としてさえ、作用、心理は関わらない、というわけだ。

さらに、次のように問題を提示されるかもしれない。隣人が雪かきにおいて困っているということが成り立っているにもかかわらず、隣人を助けようとし、そうすべきであるということを見て取らない行為者には、なにか問題があるように思われる。しかし、内在主義は、このような行為者は関連する主体的動機群を持たないがゆえに、この行為者にはなんら問題はないと言うのではないか？ もし内在主義がそのような主張するほかにないとしたら、これは内在主義の主張に反対する根拠になる。

では、内在主義は、たとえば「隣人が雪かきに際して困っている」と「隣人を助けるべきである」の間に成り立つような、主体的動機群に依存せずに内容のみによって成り立つように見える行為の正当化関係をいかにして扱うのだろうか？ そして、先の事例で見たような、その正当化関係の観点から言い立てられる行為者の問題をいかにして扱うのだろうか？ こうして、内在主義は、新たに二つの課題に直面することになる。

1. 行為の正当化が、少なくとも一部の事例においては、主体的動機群に依存せずに示されるように思われるという事実を説明しなければならない。
2. 内在主義において、一見したところ心理から独立した行為の正当化関係の観点から見て行為者に問題があるということを主張しうるのかどうか、そう主張しうるとすれば、どのようにしてかを説明しなければならない。

これらの問題は、内在主義に真正の困難を提起する。内容の間には心理に依存せずに特定の行為を正当化するような連関が成り立つのではないか、その連関の観点から、行為者を評価できるのではないかという問題には、これまでの議論だけでは応じられない。内在主義は、上記の課題に応じるために、別の道具立てを必要とする。

必要な道具立ては、ウィリアムズの哲学的知見のなかに、とりわけ、「厚い概念(thick concepts)」という考えのなかに見出される¹⁰。第 3.2 節では、「厚い概念」を導入し、それが一見したところ心理に依存しないような行為の正当化関係を説明するための手立てとなることを確認する。その後、ウィリアムズ、その主張を展開したエイドリ

ン・ムーアの見解に依拠しつつ、このような考えが、いかにして内在主義と両立するのかを論じる。以上によって、第一の課題に対処する。第 3.3 節では、第二の課題を扱い、厚い概念の要請に照らした行為者の評価について論じる。

3.2. 一見したところの「心に依存しない正当化」をどのようにして説明するか？

3.2.1. 厚い概念という道具立ての導入

「隣人が雪かきに際して困っている」ということは、それ自体で特定の行為を要請する。このように、われわれの理由は、行為者の主体的動機群によらず、その内容それ自体で特定の行為を導くように思われる。ここでの問題は、このような事態を内在主義の内部でいかにして説明するのか、であった。ウィリアムズは、このような命題に現れる概念に焦点を当て、そのような概念を用いる命題と結論づけられる行為の一般的な連関を指摘する。Williams(1985)によると、「残酷」といった一部の概念は、どのような行為を為すべきであるのかを含意する。引用しよう。

〔卑怯者、嘘、残酷、感謝といった〕これらの概念は、行為の理由に関わっているのがその特徴である。この種の概念が適用されうる場合には、それはしばしば人に行為の理由を与える。[...] これらの概念と行為の間になんらかの一般的な連関があることは明らかである。(Williams, 1985, pp.155-156; 233 頁)

ここで述べられていることには、特定の概念は、行為との一般的な連関を有し、さらには、その概念は、特定の行為の理由を与える。ウィリアムズは、このような行為指導的な概念を厚い概念と呼ぶ。厚い概念の特徴は、世界のあり方によって正しい適用が制限されていると同時に、その概念を所有する行為者を特定の行為に導くという点にある (Williams, 1985, p.156; 233 頁)。たとえば、「A は、勇敢にもその場に留まった」という命題は、「A は、逃げようとしたが、腰が抜けてしまった結果、その場に留まった」という事実が成り立っていたなら、偽となる。このように、「勇敢」という概念の正しい適用は、世界によって制限されている。それと同時に、「勇敢」という概念は、「勇敢」という概念を理解し、その概念を用いて思考する人を、特定の行為を行うように導く。このような仕方では、「厚い概念」は結論となる行為と一般的な連関を有している。

われわれの所有する概念の一部は、特定の行為を要請する。このような概念を認識することで、少なくとも一部の理由は、一見したところ心的態度に依存せずに特定の行為を要請するということを説明できる。先の事例で言えば、「隣人が雪かきに際して

困っている」という命題に含まれる、「困る」という概念は、人に手を貸すといった行為を要請するような、行為指導的な概念である。したがって、「隣人が雪かきに際して困っている」ということから、隣人を助けるべきであると主張しうる。そして、もし特定の概念を含む命題から特定の行為を導かない行為者がいれば、その人に対して、その概念の適切な展開に照らして、問題を言い立てることができる。

こうして、「厚い概念」は、外在主義者が重視する側面を説明するための説明項として働く。現に一部の外在主義者は、このような厚い概念の存在にもとづいて、理由が心的態度に(背景条件としてさえ)依存していないということを正当化しようと試みる。たとえば、菅豊彦は、「残酷」という厚い概念に着目し、「否認の動機づけがない場合でも、「残酷な」という表現が否定的な価値評価を表す表現でなくなるわけではない」という根拠から、理由は主体的動機群に依存しているという主張に反対する(菅、2004、97 頁)。したがって、内在主義の内部に厚い概念の余地を見出すことができたならば、外在主義の主張の一部を取り入れることもまた可能である。

3.2.2. 厚い概念の所有は行為者の主体的動機群に依存する

だが、概念と行為の間に一般的に成り立つ正当化の関係を認めるということは、内在主義の基本的見解と両立可能であるのだろうか？ そのような関係を認めることは、行為者の主体的動機群とは独立した理由を認めるということであって、結局は外在主義に与することになるのではないか？ このように考えられるだろう。

たしかに、「だれであれ特定の概念を使用し、自らの行為を導くべきである」と主張するならば、内在主義の洞察——理由の個人的側面、心理的側面、そして合理的熟慮との連関に関する洞察——に背くことになる。しかし、われわれの所有する概念のなかには、特定の行為を行うよう要請するものがあるという主張それ自体は、内在主義の洞察と両立する。というのも、特定の概念を主体的動機群にもとづいて把握する行為者だけにその概念が要請する行為を行う理由があると考える道が存在するからである。このような方策は、当該の主張を受け入れつつも、依然として、内在主義の基本的な主張に忠実である。じっさい、ウィリアムズ自身は、このような方策を受け入れ、厚い概念を用いて行為を導く傾向性は、人がなにごとかを目的とする態度に含まれると主張する(Williams, 1989b, p.37)。

ウィリアムズの見解を展開し、エイドリアン・ムーアは、「一部の概念に関しては、当該の概念を所有する誰もが、まさにその概念を所有することによって、特定のことがらを行う特定の理由を有する」と主張する(Moore, 2003, p.39)。ここで、ムーアは「概念の所有」をなかば専門的な意味で用いる。ムーアの整理では、「概念の所有」とは、概念を「参与した仕方(the engaged way)」で把握しているということであって、

「参与しない仕方(the disengaged way)」で把握しているということではない。筆者は、この区別を見ていくことで、内在主義において厚い概念というアイデアを受け入れる方策の内実を明らかにしたいと思う。ムーアは、概念を所有するための「参与した仕方」と「参与しない仕方」を以下のように区別する¹¹。

概念を参与しない仕方では把握することは、その概念が(正しく)適用されうるの
がいかなる場合であるのか[...]を認識しようということである。参与した仕方
で概念を把握するとは、このような[正しい適用の認識]を行いうるということ
だけでなく、その概念を自分自身に適用する準備があるほどに親しんでいると
いうことである。その概念を自分自身に適用する準備があるとは、たんにコミュ
ニケーションの公の活動においてその概念を適用する準備があるというだけで
はなく、人が世界について考えるなかで、そして、人が自分の問題に対処するな
かで、その概念を適用する準備があるということである。(Moore, 2003, p.48)

ムーアはここで、「概念をたんに正しく適用できる」という、その概念に〈参与しない
仕方〉での概念の把握と、「概念を正しく適用できることに加えて、それによって自
分の周囲の状況を記述したり、自分の行為を導いたりする」という、〈参与した仕方〉
での概念の把握を区別している。たとえば、文化人類学者が「この地域の人々はしかじ
かの場合に「臆病」と言う」とノートに書き記す場合には、正しい適用を理解している
が、それ以上の仕方では、その概念に参与しているわけではない。だが、われわれは、「臆
病」といった厚い概念に、それ以上の仕方でも関わることもできる。「この行為は臆病だ
から、この行為を控えよう」というように、自分の行為を導くために、「臆病」という
概念を参与した仕方では把握することもある。参与した仕方では概念を把握する行為者は、
勇敢な仕方では行為することに対してポジティブな感情を抱き、臆病な仕方では行為する
ことに対して、ネガティブな感情を抱く。要するに、概念を参与した仕方では把握する
とは、なにごとかを評価したり情動的に応答したりするような、主体的動機群を背景と
して、当該の概念が用いられているということである。

ウィリアムズやムーアのような内在主義者が認めているのは、参与した仕方では概念
を把握するような行為者に対して、厚い概念は特定の行為を要請するということであ
る。そして、参与した仕方では概念を把握する行為者とは、すでに関連する主体的動機群
を有する行為者である。参与した仕方では概念を把握する行為者は、厚い概念を用いて
状況の評価する傾向性、その評価によって怒りを覚えたり、自責の念を覚えたり、恥を
覚えたりするといった感情的反応のパターン、厚い概念によって記述された計画、コ
ミットメントを有しているからである。つまり、内在主義にもとづくと、厚い概念を把
握するということは主体的動機群に依存しているため、主体的動機群は、特定の概念

を含む命題が理由であるための背景条件であると考えられる。

こうして、内在主義は、厚い概念という考えを支持しつつ、内在主義を保持することができる。ウィリアムズは、それでもなお、依然として外在主義との対立点が残りと指摘し、以下のように主張する。

この「厚い概念は行為指導的である」ことは、この種の所与の概念[...]を用いる話者が、その概念の適用という観点から、その概念を用いない他の行為者が特定の行為のコースを避けたり追求したりする理由を有する、と正しく言うことができるということを意味しない。話者が示さねばならないのは、その行為者はこの概念を用いる理由を有するということ、つまり、そのような用語を用いて彼あるいは彼女の経験を構造化する理由をもつということである。(Williams, 1989b, pp.37-38)

ここでウィリアムズは、概念を参与した仕方では把握しない行為者に直面したときに何を言うのかという観点から、内在主義と外在主義の対立を見出している。一方で、外在主義者は、自身の用いる概念にもとづいて、当該の行為者には「外在主義者自身の用いる概念によって要請される行為」を行う理由があると述べる。他方で、内在主義者は、主体的動機群に照らしてその行為者にとってその概念を用いる理由があると示されない限り、そのような主張を行わない。

Williams(1996a)の例を用いて、この点をもう少し説明しよう。ここに猫を苦しめている少年がいるとしよう。あなたが「残酷である」という概念を参与した仕方では把握しているなら、あなたは、その行為は残酷であるがゆえに、あなたはその少年にその行為をやめさせるべきである。だが、その少年自身は残酷であるという概念を持ち込んでその状況を記述し、その記述にもとづいて行為を導くのではないかもしれない。その行為をストレス解消として記述し、行為を導いているということもありうる。

一方で、内在主義の診断では、このとき、もし少年の主体的動機群に関連する要素が欠如しているのであれば、「[その少年に]「残酷」という概念を用いるようにさせるものはなにもない」(Williams, 1996a, p.237)。われわれには、その少年に行為を止めさせ、危険人物としてその少年を扱う理由があるかもしれない。しかし、その少年自身には、その行為を止める理由はない。他方で、外在主義によれば、この少年には、われわれの有する概念(「残酷」)に照らして、行為を止める理由がある。このように、少年の主体的動機群とは独立に「われわれ」の有する特定の概念にもとづいて理由があるか、そのように言うことはできないかによって、外在主義と内在主義の対立は残り続ける。

3.3. 厚い概念に照らした行為者の問題・間違いはいかにして扱われるのか？

最後に示唆した仕方で外在主義と内在主義の論点を整理するなら、外在主義はより説得的であると思われるかもしれない。たとえば、「この行為は残酷である」という命題を信じているにもかかわらず、「しかし、この場面で残酷な行為を行うことで、私は金銭的な利益を得ることができる」という考慮からその行為を目的とする行為者には、なにか問題がある。さらに、猫を虐待する事例では、その状況を残酷なものとして見ない行為者には、そう知覚しないということそれ自体に、なにか問題がある。このように考えられるからだ。外在主義者は、この洞察を容易に受け入れられる。では、内在主義の道具立てにおいて、行為者の問題、行為者の間違いを扱うことができるであろうか？

第 3.2.2 節で導入した〈参与した仕方で概念を把握する行為者〉と〈参与した仕方で概念を把握するのではない行為者〉という区別に準拠して、場合分けをして考えよう。

はじめに、参与した仕方で概念を把握する行為者について。われわれは、特定の概念を用いて事態を記述し、それによって行為を導く準備があるにもかかわらず、その概念の要請に背くような行為者を考えることができる。ある人は、その行為は残酷であり、その行為を避けることを要請されていると分かっているが、「この場面で残酷な行為を行うことで、私は金銭的な利益を得ることができる」という考慮から、たとえば無事の人々を惨殺するといった残酷な行為を行うかもしれない。本稿で描き出している内在主義に依拠するなら、この行為者は、みずからの参与する概念に忠実ではなく、みずからのコミットメントと行為が整合していないということから、合理的に欠陥があると考えられる(cf. Moore, 2003, p.43)。行為者自身の主体的動機群を足掛かりに、当該の行為者に対して合理性の問題を言い立てるということは、第 1 節末に言及した内在主義の動機に沿っている。参与した仕方で概念を把握する行為者の場合に、内在主義は、行為者の理由に関する誤り、問題の余地を残す。

次に、参与した仕方で概念を把握しない行為者について。われわれは、「特定の概念を用いて事態を記述し、それによって行為を導く」準備がないような行為者を考えることができる。たとえば、猫を虐待する事例の少年がそれに当たる¹²。仮定によって、この行為者には関連する主体的動機群が欠如しているため、内在主義によれば、この少年に理由に関する誤りを帰することはできない。したがって、この例に関して、だれかが「行為者は理由にしたがっておらず、理由の観点から問題がある」という直観をもつなら、その直観を斥けるべきだということになる。当該の行為者は、特定の概念にまつわる規範のなかで誤った一手を打っているのではなく、いわば、その概念にまつわる規範のなかで一手を打っていない。少年は、理由に関する誤りを帰属するための基礎を欠いている。こうして、内在主義にもとづくと、猫を虐待する少年とそれを残酷であると考えて虐待を止めさせようとする行為者の間には、理由に関する誤りという観点から考えるとき、差異はないということになる。

しかし、以上の考察は、別の観点から二人の間には差異があるという主張を妨げるものではない。われわれは、二人が所有している概念を考慮して、人々の共同体における関係性という観点から、一方の行為者には問題がなく、もう一方の行為者には問題があると主張する。このように主張する際に、決定的に重要であるのは、概念を所有するのは個人であるが、その概念それ自体の含意は個人に依存しないという対比に目を向けることである。概念それ自体は、歴史的な文脈をもち、その文脈を負いつつ、共同体のなかで特定の役割を果たしている。ウィリアムズは、この微妙な関係を捉えて、以下のように述べる。

〔…〕人がいかなる厚い概念のレパートリーをもつのかという問いは、その人自身、あるいは、その人が生きる社会の倫理的態度を露わにしている。倫理的文化間の重要な差異は、その文化内で、いかなる厚い概念がどのような働きをしているのか、ということに関わる。(Williams, 1996a, p.237)

筆者の理解では、ここでウィリアムズは、二つの点を指摘している。第一に、人がいかなる厚い概念を所有するのかということは、その個人の倫理的態度を表現している。第二に、同時に、厚い概念は社会的・文化的な文脈を担うもので、厚い概念は、その社会の倫理的態度を表現している。

われわれは、第二の点にもとづいて、共同体における位置づけという観点から行為者を評価することができる。たとえば、「残酷」という概念、そしてその概念にもとづく実践は、特定の共同体において互いに信頼し合う人間関係を支えている。人や行為について「残酷」という概念を適用することは、その人やその行為を身に危険を及ぼす可能性をもつものとして見ることを含む。共同してなんらかの仕事を達成するにあたって——少なくとも、相手は自分に危害を加えないという信頼のもとに仕事を達成するにあたって——、相手は残酷ではないという信念は、不可欠な役割を果たす。したがって、残酷という概念を所有しない行為者は、互いに信頼しあう人間関係を結ぶという観点から、適切なあり方をしておらず、問題がある。こうして、参与した仕方で概念を把握しない行為者に関して、共同体における役割という観点から、その行為者の問題を説明することが可能である。それによって、内在主義は、特定の概念を所有せずにそれによって事態を記述しない行為者には、それ自体で問題があるという直観を救うことができる。

おわりに

本稿は、内在主義を基礎に、外在主義の真理を正当に扱うことを目指してきた。具体

的に言えば、第 2 節では、「理由と背景条件（とりわけ、内容と作用）の区別」を導入することで、われわれは純粋に利他的に行為しうると主張した。第 3 節では、「厚い概念」という考えに依拠し、理由は行為と一般的な連関を有するという主張を、内在主義に取り入れた。

だが、以上の主張を受け入れても、依然として、内在主義と外在主義の対立点は残り続ける。一方で、外在主義は、行為者本人が特定の概念を所有しようがしまいが、その概念の観点からそうすべきものはそうすべきである、という見解を打ち出す。他方で、内在主義によれば、概念を所有していない人に対して当該の概念によって要請される行為の理由を主張するなら、その主張は、正当な主張の範囲を超え出ることになる。概念それ自体がいかなる含意を有するのかということは、個人を超えた問題であるが、その概念を携えて生きるのかどうかは、個人の問題であり、理由はそのような行為者個人のあり方に関わっているからだ。

内在主義と外在主義のどちらに軍配があがるのかを見極めることは、本稿の仕事ではなかった。だが、本稿の議論は、この論点に無関係ではない。本稿は、内在主義に依拠しながらも、外在主義の洞察を含む真理を尊重するような理論を構築することを目的とした。そしてその結果、内在主義は、個人のあり方を重視しながらも、行為者の利他性や社会的・歴史的な背景を尊重しうる理論であるということを明らかにした。

参考文献

- Anscombe, G. E. M. (1974) [2005]. "Practical Inference". in *Human Life, Action and Ethics*. [早川正祐訳 (2010)、「実践的推論」、『自由と行為の哲学』、春秋社。]
- Baize, Micah J. (2012). *Bernard Williams's Internalism: A New Interpretation*. Doctoral Dissertation. University of Kansas. (Unpublished).
- Crisp, Roger (2006). *Reasons and the Good*. Oxford University Press.
- Markovits, Julia (2014). *Moral Reason*. Oxford University Press.
- McDowell, John (1995). "Might There Be External Reasons?" in J. E. J. Altham & Ross Harrison (eds.). *World, Mind and Ethics: Essays on the Ethical Philosophy of Bernard Williams*. Cambridge University Press. [村上友一訳 (2016)「外在的理由はありうるか?」、『徳と理性』、勁草書房。]
- Moore, A. W. (2003). *Noble in Reason, Infinite in Faculty: Themes and Variations in Kant's Moral and Religious Philosophy*. Routledge.
- Moreau, Sophia R. (2005). "Reasons and character". in *Ethics* 115 (2):pp.272-305.
- Nagel, Thomas (1970). *The Possibility of Altruism*. Oxford Clarendon Press.

- Parfit, Derek (2011). *On What Matters*. Oxford University Press.
- Patrick, Colin (2012). *Internalism, Practical Relations, and Psychologism*. Doctoral Dissertation, University of Chicago. (Unpublished).
- Scanlon, Thomas, M. (2014). *Being Realistic About Reasons*. Oxford University Press.
- Schroeder, Mark (2007). *Slaves of the Passions*. Oxford University Press.
- Setiya, Kieran & Paakkunainen, Hille (eds.) (2012). *Internal Reasons: Contemporary Readings*. MIT Press.
- Williams, Bernard (1979) [1981] . “Internal and External Reasons”. in *Moral Luck*. Cambridge University Press.
- (1985). *Ethics and Limits of Philosophy*. Routledge. [下川潔・森際康友訳 (1993)『生き方について哲学は何が言えるか』、産業図書。]
- (1989b) [1995] . “Internal Reasons and the Obscurity of Blame”. in *Making Sense of Humanity*. Cambridge University Press.
- (1995). “Replies”. in *World, Mind, and Ethics: Essays on the Ethical Philosophy of Bernard Williams*, J. E. J. Altham & Ross Harrison (eds.), Cambridge University Press.
- (1996a) “Truth in Ethics”. in *Truth in Ethics*, Brad Hooker(ed.). Blackwell.
- (1996b) [2006] . “Values, Reasons, and Persuasion”. in *Philosophy as a Humanistic Discipline*, A. W. Moore (ed.). Princeton University Press.
- (2001). “Some Further Notes on Internal and External Reasons”. in *Varieties of Practical Reasoning*. Elijah Millgram (ed.). The MIT Press.
- ※0内は初出の出版年を記しており、[]内は、参照した論文集の出版年を記している。
- 安倍 里美 (2016)「理由に依拠した規範性理解は非自然主義擁護に貢献しているのか」、『倫理学研究』46: 193・205 頁。
- 菅 豊彦 (2004)、『道徳的實在論の擁護』、勁草書房。
- 鴻 浩介 (2016)「理由の内在主義と外在主義」、『科学哲学』49・2: 27・47 頁。

¹ 本稿の内容には、「鴨川メタ倫理学読書会（通称カモメ読書会）」の成果が反映されている。カモメ読書会の参加者諸氏、そして、本稿の草稿を検討していただいた、言語哲学研究会の参加者諸氏、宗教論読書会の参加者諸氏、川瀬和也氏、佐藤岳詩氏、高田敦史氏、鴻浩介氏に深く感謝する。

² 本稿では、理由の存在論には立ち入らない。「命題」ということによって想定しているのは、以下の二つが成り立つということである。(1)心的態度の内容になりうる。(2)それが真であるならば、事実と同一視される。

³ 内在主義的説明において言及された〈健全な熟慮の過程による結論への到達〉は、熟慮の実際の過程に特徴的な心理的効果を除外するような、理想化あるいは抽象化された形で理解されるべきである(Williams, 1996b, p.110)。

⁴ Setiya(2012)をはじめ、近年では、「理由に関する内在主義：p という事実は、A が ϕ するための理由である only if A は p という信念によって ϕ するよう動機づけられる」と定式化される(Setiya, 2012, p.4)。本稿の定式は、主体的動機群の対象をも理由に含んでいるという点で異なる。一部の論者は、理由は事実的でなければならないと考えるが、理論的な事例と実践的な事例で、理由が同じ性格をもつと考える必要はない。したがって、本稿では、目的を含む定式を受け入れる。

⁵ 以上の内在主義の主張は、理由は目的に還元可能であるといった主張を含まない。本稿では、内在主義を必要条件に関する主張としてのみ理解する。

⁶ ウィリアムズの特徴づけはより複雑で、Williams(1979)では、それは想像力の発揮といった多様な要素を含むことを指摘している。Williams(1996b)では、その多様な要素を「真理に向けた説得」という観点から説明している。

⁷ なぜこのような特徴を考慮すべきであるのかということに関しては、いくつかの根拠を提示することができる。筆者は以前、行為の理由に関する言明と事態の望ましさに関する言明の性格の違い、それらに関する熟慮の違いから、これらの点を支持した(中根, 2017)。

⁸ 筆者の理解では、外在主義を支持する軸となるのは、(1)自己関与的理由／非自己関与の理由に関する洞察、(2)理由のなす独自のネットワークに関する洞察、それと関連して、(3)理由の還元不可能性に関する洞察、(4)理由の普遍性に関する洞察である。

⁹ Moreau(2005)は、本稿に対して可能な再批判を提示している。ソフィア・モローによれば、内容と作用の区別を認めたとしてもなお、内在主義は、自分がなんらかの主体的動機群を有するという理由にもとづく熟慮によって行為を導くことも同様に合理的であるということを認めねばならない。内在主義によれば、理由はそのような心的態度に依存しているのだから(Moreau, 2005, p.291)。筆者の見解では、この批判にも同様に、内容と作用の区別によって応じることができる。その区別にもとづくなら、「p」という命題にもとづく熟慮と「私はpと欲する」という命題にもとづく熟慮は別の熟慮である。そのため、前者の熟慮が合理的であると認めることは必ず後者の熟慮も同様に合理的であると認めることを含意しない。内在主義が認める必要があるのは、後者の熟慮に現れる命題が理由である場合、「自分の欲求を充足する」ことに對する主体的動機群のような別の態度が必要であるということのみである。

¹⁰ 本稿の以下では、厚い概念に関してのみ議論を展開している。そうすると、薄い概念を用いた理由についてはどうするのかと問われるだろう。この点に対処するにあたって、内在主義には、少なくとも二つの道が存在する。第一に、薄い概念を用いた理由については、それが心的態度から独立しているように見えるという外観を一切考慮しないという道がある。第二に、薄い概念を用いた理由に即した仕方(たとえば「合理的行為者性」という概念のみにもとづいて)内在主義の内部で一見したところの独立性を説明するという道がある。どちらのほうがより有望な選択肢であるのかということに関しては、本稿では扱わない。

¹¹ この区別を認めることは、完全に人の目的から離れて、記述的要素のみによって概念を適用しようという主張を認めることではない。この区別を認めつつ、さらに、参与しない仕方(概念を把握する人も同様に、想像的観点から目的を受け入れ、概念の適用を理解するのだと主張することもできる(cf. Williams, 1985, pp.141-142)。

¹² ウィリアムズは他に、「これは冒流だと思いませんか？」という問いに対して、「「冒流」など私の語彙にはない」と答えた、オスカー・ワイルドの例を挙げている(Williams, 1996a, p.237)。